

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## エピローグ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之, Taketani, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1782">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1782</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## エピソード

竹谷 和之

国際セミナー最後のプログラム(ワークショップ)として、神戸市外国語大学弓道部の稽古場へ、バスク研究者7名とともに移動した。10名あまりの弓道部員が私たちを出迎えて、さっそく弓道体験となった。まず、弓道部主将による試技を見学。見事、命中した。バスク人たちはそれぞれのイメージを作り上げ、いざ初体験! 的まで五メートルほどの距離まで近づき、一人につき弓道部員一名の補助がついて矢を放つが、的に嫌われなかなか中らない。一人二人と的に中るようになると、ガッツポーズも飛び出した。なごやかな雰囲気の中で、セミナーの終わりを告げていることを全員が感じ取っていた。

彼らが神戸に全員揃ったのは八月二日である。当日午前には、まず神戸の中心にある生田神社の「生田の森」へと移動し、セミナーの成功を祈願した。樹齢五〇〇年以上の楠が、静かなたたずまいを見せている。ビルに囲まれたそのど真ん中に、永遠を感じる時空間がある。このコントラストに彼らはとても喜んだが、実はこれが今回のテーマでもあった(グローバルゼーションと伝統スポーツ)に直結しているのである。

神戸は明治期以降、西洋化によって共同体変容を余儀なくされた都市であり、また中国からの移民による街の礎もできあがった。しかし、人々の心は日本の伝統を捨てず、都市化のなかでいかにそれを維持するかに腐心してきた。小さいながらもあちこちに神社や寺院が点在する。そして移民の信仰を制限することなく、カトリック教会、ユダヤ教会、回教寺院モスク、ヒンズー寺院、中国廟、などがごく近くに存立している。そして見事に調和している。

さらに、都会から徒歩でアプローチできる六甲山系はスポーツのアーリーナである。日本最初のゴルフやトレッキングコースの開拓、西洋スポーツ導入などの中心を担ってきたのが一〇〇年以上の歴史がある外国人スポーツクラブ K R & A C (Kobe Regatta and Athletic Club) のである。港はさま

ざまな人や文化が行き交う。神戸での国際セミナー開催は、その意味でも最適地であったと思う。

国際セミナー開始までの期間は、フィールドワークに当てられた。期間が短いので、神戸から日帰りのできる範囲内であった。

八月二日の午後は尼崎まで移動し、だんじり祭を見学した。午後七時ころより、町内会で区分けされた屋台(山車)が、観衆の面前で正面から接近し、ぶつかるときに相手よりも優位な位置をとろうとする。バスクの人々は、次々と繰り出される屋台とそれを支える若者の威勢の良さに圧倒されていた。夜陰の中で、提灯の淡さが醸し出す雰囲気は格別で、別世界そのものであった。これも競争ではあるが、経験豊かな長老の仕切りとそれに呼応する若者の行動が、明暗をわけていた。

三日は、相生市のペーロン体験である。長崎から持ち込まれたペーロンが、神事を保持したまま当地で定着し、市の特別な文化へと変化した。毎年五月最終日曜日に、この地区のペーロン大会が盛大に実施される。今回は市政七〇周年記念の体験乗船である。一般の人々とともに、太鼓のリズムに合わせて声をかけ、櫂をこぐ。クルーの息があえば、かなりのスピードがでる。高速で進んでいる時の、水中への櫂の入れ方が難しいと話題になった。

夜は、姫路城の三の丸広場での薪能を堪能した。物語を知らない彼らの興味は、もっぱら心地よく響く言葉や、きらびやかな衣装であり、そして独特の空間であった。セミナー期間中、能面制作と展示をお願いしていただけに、薪能がどのように受け取られるか楽しみであった。

四日は京都へお寺参りである。西本願寺では境内の静かさと、木の建築がとても気にいったようだ。堂内では思い思いに座り込み、仏像と対峙していた。次に、龍安寺。石庭で有名であるが、あまりに観光客が多く、そして暑く、静かな環境は望むべくもなかった。三番目に、金閣寺。圧倒的な輝きを放つ金閣は、その場に立つことで疲れを吹き飛ばすだけの迫力があつた。そして最後に、上七軒演舞場。北野天満宮の隣にあり、すでに多くの客でごった返していた。かれらの興味は、「Geisha」という女性への関心である。京都では舞妓や芸妓というが、芸者とはいわない。身近に見る彼女たちの言葉や仕草と出会い、世界観などに触れるにはもう少し時間

が必要であった。それでも、舞妓や芸妓の話題の豊富さ、目配り心配りが随所に感じられ、大満足であった。

フィールドワーク最後日の五日は、神戸である。ロープウェイで背山に登り、ひとしきり眺めを楽しんだ。その後、トレッキングコースを下り、貯水湖や布引の滝を経て、新神戸へ。そして灘の酒蔵資料館へと移動し、歴史的な様々な道具や詳細な作業工程を確認し、このあと試飲する新酒への思いを馳せていた。

フィールワークは短期間に詰めすぎたきらいはあるが、セミナーへの準備としては十分であったと思う。

そして、神戸市外国語大学三木記念会館における四日間のセミナーは、午前八時半から午後六時まで、ぎつしりとプログラムが詰まっていたが、ほぼ予定通りに進化した。最初は今福先生の日西二言語による特別講演である。初めての試みであると言われていたが、参加者を圧倒するプログラムであった。

日本の講演や発表は、グローバリゼーションの意味やそれにもなう文化的変容について各専門分野（歴史、人類学、民俗学、思想・哲学、など）からアプローチされた。そしてグローバリゼーションの内包する問題点を批判的に議論された。ここではグローバルスタンダードとしての西洋的価値観あるいは思想・哲学が反映され、それに基づいてスポーツ文化が影響を受けて変容している、という。

一方、バスケットからは、当該テーマについてスポーツ社会学の運動行動学的視点から発表された。つまり、グローバリゼーションとは結果であって、意味よりも現況の構造的理解に焦点をおいたものであった。日本からの視点である西洋文化のグローバル化については、当然ながらアプローチされなかった。

テキストの日西両言語への翻訳は活発な議論への足がかりとなっていたようである。この差異の理解にこそ、今回セミナーの目的の一つであった。

能面の面打実演では、「目でみて、手が動く」という表現とその事実がバスケの人々にとっては、驚きであった。ごく普通に会話をしながら、どんだん面が仕上がっていく。「無意識」の究極を目のあたりにしたようだ。

また、太極拳では、わざわざ東京から日帰り、李自力老師が駆けつけてくださり、表演をいただいた。その流れるような静かな動きの中に、力強さ、柔らかさ、そして気の動きが見える。バスケの人々は、東洋の身体的一端を垣間見たのではないかと思う。

そして最後の西谷先生の特別講演では、哲学・思想の世界からはじめて具体的にスポーツ文化について語っていたと思う。そして、私たちに新たな視点を提供していただいた。私はこれを「贈与」として受け取り、「返礼」ができるように努力したいと考えている。

今回の国際セミナーでは、稲垣先生はじめ学外の実行委員の皆さまに大変お世話になりました。ありがとうございました。テキストの日西翻訳は、本学イスパニア学科の教員、院生、学生の皆さまのご協力がなければ実現しなかった。最後に、準備段階からの神戸市外大研究所の献身的な支援に感謝いたします。

二〇一三年四月三日